

目的 食嗜好に関する研究は今迄にも多数の報告がみられる。特に近年は電算機の発展により、各種クラスター分析、多変量解析などが嗜好研究にも応用され、様々の成果が挙げられている。しかしながら、食嗜好に影響する要因が非常に多く、且複雑であるところから、カテゴリーの設定も困難な状況にある。本研究では、これらの複雑な嗜好がどのような要因によるものかを明らかにするため、調査実験を行った。

方法 昨年と同様の試料、おぼろ、シーモア、梅干し、味梅、マリー、マクビティゼスケットおぼろ、ダージリン、アツサム、セイロン、キーモン紅茶。パネルは大妻女子大学学生2000人を対象に実施を行った。調査法は、Ellisの方法を参考にし、自由に記述させ、この中の形容詞、形容動詞を「生活概念分類表」を用いマイニング、外国文献社製パスキーで集計した。

結果 ① 昨年用いた食分類表を、更に拡充、細分化して、「生活概念分類表CLC」を作成した。これは10進数形式4桁事後組み合わせ分類表である。② 外観的にはどの食品も自然嗜好、本物嗜好が強く、30%以上を占めていた。香りについては、快、不快の判断がもっとも多く、20%以上を占めていた。また、味覚特性についても、うまい、まずい、で20%ほどを占めていたのが理解された。快、不快に関する概念(好み易い、こうばしい……)は、色、香とも出現頻度の高いことが示された。